

青年期女性における母親からの分離に関する 一考察

—— 食と性，身体の問題を通して ——

心理学部臨床心理学科 根本眞弓

抄録：親から分離することは、親を喪失することと同義であり、喪失体験は分離不安や見捨てられ不安を青年にもたらす。本論では、過食や下剤の使用、性的問題行動を繰り返した青年期女性が、母親から精神的に分離していくプロセスを、食、性、身体イメージの変化という観点から考察した。親から分離した一人の「私である」ためには、親との間に自他の境界を形成し、自己の身体を自分のものにするのが不可欠である。母親と一体となった未分化な身体的自己をもったクライアントの内的世界には、自己の内部に摂取された母親対象が物理的に存在しているようであった。その体内化された母親対象を自己の身体から排泄し切り離していくことによって、クライアントは母親対象を心理的に喪失し、「私である」ことが可能となった。食や性が絡んだ症状や問題行動の基底には、取り入れや排泄に関する内的空想が存在しており、その内的空想への理解を通してクライアントの身体と情緒をつないでいくことが、個性化した自己の生成に寄与すると考えられた。

キーワード：分離不安、見捨てられ不安、精神が身体に宿る、体内化、私であること

I はじめに

青年期の発達課題とその危機について、Erikson (1959/1973) は“同一性対役割の混乱”をあげており、アイデンティティの確立を通して自己を社会の中に定位できない時、アイデンティティの拡散と混乱を招くと述べている。このアイデンティティの確立には、① 父母対象表象からの脱離給と父母に対する境界の確立。② 親密さの同世代の同性・異性の共有と、性同一性の確立。③ エディプスコンプレックスの解決と性器統裁の完成。④ 幼児期以来の超自我・自我理想・家庭内の価値観・自己像などと、家庭外の社会的現実との出会いによる再構成。⑤ 再構成過程での家庭内の古い自己と、家庭外の新しい自己との二重性とその使い分け (小此木, 1980) といった、青年期の内的発達課題の達成が不可欠である。多くの青年

達は、これらの内的課題と取り組みながら社会の中に居場所をみつめていくのであるが、乳幼児期に親との間で十分な愛着関係を結ばなかった人や、それまでの発達課題をワークスルーしていない人、外傷体験などの問題を抱えた人が、この青年期の課題を進展させるには困難が生じやすいと考えられる。

Mahler (1975/1981) は、胎内から生まれ共生段階にあった赤ん坊が、分化期、練習期、再接近期をへて対象恒常性を獲得し、母親とは異なる存在として自己を体験し、自立に向かう分離のプロセスを、分離-個性化理論として描き出した。この分離-個性化理論を思春期の子どもが母親から分離し自己を確立していく過程に援用したのが Blos (1962/1971, 1967) である。彼は、“乳児が個性化した幼児となるために共生の膜から孵化するのに対し、青年は家族への依存から脱却して幼

兒的な対象との結びつきを緩め、より大きい社会である大人社会の一員となる”として、青年期を第二の分離個体化期と位置づけた。

親から分離し自己を確立していくということは、親を喪失することと同義であり、この喪失体験は分離の不安を青年にもたらす。それは彼らに不安感、孤独感、絶望感、無力感として体験され、この不安に耐えられるだけの自己をもたない青年たちに、様々な症状や問題行動を生じさせるものと思われる。Masterson (1972) は、母親からの分離不安が増大した思春期境界例患者が再接近期と同様の葛藤や不安を再現させ、“見捨てられ抑うつ”を生じさせ、口唇期固着へと退行することを明らかにした。

そこには子どもが退行的・服従的であると愛情を与えるが、自立的・自己主張的であると愛情を撤去する、子どもとの分離に耐えられない母親の存在がある。子どもは愛情を与える良い母親と愛情を撤去する悪い母親に分裂した対象像をもつとともに、それに呼応した良い子・悪い子に分裂した自己像をもつことになる。これが再接近期に活性化し、境界例の病理を生じさせるという。青年期患者との面接の中で、境界例の病理はないまでも、上述した自己イメージや内的対象関係をもっていると感じさせる事例に出会うのは筆者に限らないであろう。

青年期の患者が依存と独立の葛藤や不安の中で母親から分離していくプロセスを、分離個体化の観点から臨床事例を元に論じたものには、青年に対する新たな理解者、依存対象、同一化対象たる“new object”としての治療者像を描きだした乾 (1980) や、橋渡しとしての父親の役割の重要性について言及した牛島・福井 (1980)、廣井 (2003)、セラピストの逆転移から分離のテーマを扱った津田 (2001) の論文がある。しかしいずれも、青年期女性が母親から分離するプロセスで生じるクライアントの内的世界や、内的ファンタジーについてはほとんど触れられていない。

本論文では、過食と性的問題行動のある青年期女性の事例を提示し、これらの症状や問題行動の基底にあって、無意識から患者を動かしていたと思われる内的対象関係や自己イメージについて、力動的観点から述べるとともに、それらが母親からの分離と個体化にどのように顕れ影響を及ぼしたかについて考察する。

II 事例の概要

クライアント A は、「考えがまとまらないし、病気になりたがる。すぐ疲れる」という主訴で来談した 23 才の女子大生である。大卒で会社員をしている父親と中卒で専業主婦の母親のもとに第 1 子として生まれた。父親の両親は結婚後すぐに離婚し、父親は祖父母に養育されている。母親は、母親が小学生の時父親と死別している。A は父親を凝り性で子どもっぽい人だと感じており、母親のことは真面目な努力家であると語った。他には高校生の妹と、元芸者をしていた曾祖母がいる。

幼少期の思い出を聞くと、幼稚園の頃、絵の展覧会に友人家族と一緒にいった時、「おなかすいた」と言って母親にきつく叱られた事や、車酔いで吐いて叱られた事などを想起し、自分ではどうしようもないことで叱られてきたと語った。しかし A は、母親からの叱責に対して一度も反抗したことはなかったという。14 才頃から人と食事をするのが嫌で、家族と食事後自室で食べ直していたが、そのことを母親からは意地汚いと言われていた。小学校時代から現在まで、A には普通の友人はいたというが、親密な同性の友人関係はもっていなかったようである。高校時代のボーイフレンドとは母親の反対で別れている。地元の短大に合格するが、4 年制大学に行くことを望んだ母親の意向に沿って再受験し、親元から離れた大学に入学している。大学には 8 年いるつもりで 1 年時は大学に行かず下宿で TV や本を読んで過ごしていたというが、父親が借金を作った為に 4

年で卒業しなければならなくなったと語った。

Ⅲ 面接経過

以下セラピストを Th と略記。A の言葉「 」
Th の言葉<>

インテーク 当時 Th は大学の学生相談室に勤務しており、そこに A が自発的に来談して面接が始まった。A は大柄で色白、ポチャとした可愛い感じの人で、人当たりも良さそうに見えた。「気分が沈むのでうつ病ではないか」と言いつつ、「病気になった母や友人が羨ましい」「話しているうちに自分がわからなくなる」とにこやかに語った。また「母は愛情深いが離してくれない」「一人の人間になりたい」「病気になりたいというのも逃げ、うつ病になればそのせいでできる」等々、持参したノートを見ながら溢れ出すように話した。「こんなに機関銃のように喋っていいんですか」と言いつつ話す内容は上滑りで、Th には実感をもちにくいものであった。Th は A の言葉が拡散していくように感じて不安を覚えたが、病気になりたいと言いつつ、それを逃げだと語るなど現実感はある状態像は神経症水準であろうと考えた。アイデンティティの問題や母親との葛藤が背後にはあると思われたが、主たるテーマは卒業を控え社会に出ることへの不安であろうと考えた。卒業学年でもあり深めるような面接よりも現実面をサポートしながら、心の中を整理していくような方向で関わっていこうとこの時点では考えていた。

第 1 期（#1～#12）「練習の場」として相談室を使用する決心をするまで

インテーク後も、A は実感を伴わない話し方で食品管理や環境保護など、自分自身から遠い話を次々と語った。Th は A がその話から何を Th に伝えようとしているのか感じ取れないでいた。その為、A の内的イメージをつかもうとバウムテストと風景構成法を提案し実施した。

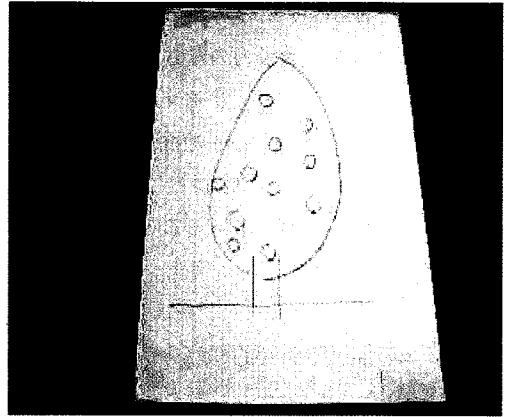


写真1 バウムテスト

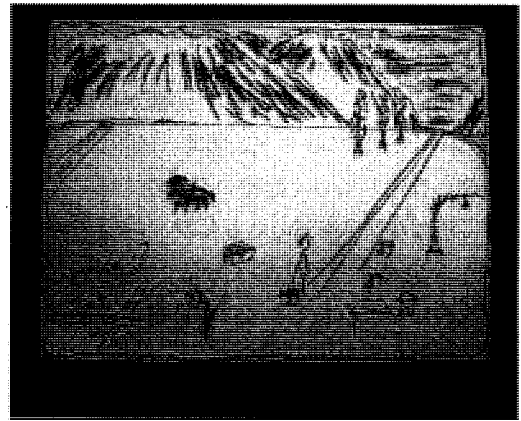


写真2 風景構成法

{バウムテスト} [写真1] バウムはまるで挿し木のように、大地に根ざしておらず、危うさを感じさせた。筆圧も弱く頼りなげな木で、樹冠と実の重なり合いなども見られ、自我境界の脆弱さや、精神状態の不安定さを感じられた。1本の線ではあるが地面が描かれたことが安定装置の役割をしていると思われた。しかしそれは一方で根っこを切断しているようにも感じられた。

{風景構成法} [写真2] この絵について A は、「川の流れは手前から奥に流れており、上の世界は悟り・思考の世界、山は美しいが今は登るかどうかわからない。境界線はブヨブヨしている」と語った。

バウムテストと同様、ここでも救いは上の世界

と下の世界を分けている境界線の存在であると思われた。下の世界の構成力のなさや全体の空虚感からみると、重いボーダーラインか精神病圏の人のようにも感じられたが、「地面」と「境界線」を描けた事は、Aの中に脆弱ではあるが自我境界を作れるだけの健康さがあることを示していると思われた。

この2つの描画や防衛的に自分から遠い話をし続けるAのありようからすると、当初Thが考えていたよりもAの病態が重いのではないかと思われた。「自我同一性の拡散状態」あるいは「軽度のボーダーライン」水準のクライアントであると考え直し、バウムテストの「根づかなさ」や風景構成法の「からっぽさ」が豊かになるような関わりが必要であろうと考え、Aの内的世界を一緒に探索していく面接の必要性を感じた。Aの上っ滑りな言葉を実のあるものにするためには、Aが自分自身の内的世界や感情に気づき、その感情を自ら抱えられるようになる事が必要であろうと思われた。

以上の理解に基づいて、Aが感じたり思ったりした事に焦点づけて聞いていくと、今までの機関銃のような話し方がおさまり戸惑った様子になった。そして、「父は何でも生い立ちのせいにして先の事を考えない。父の事を哀しいな—とってから生きるって何かと考え出した」と語った。しかし次のセッションから、面接に来ることの「しんどさ」を訴えるようになった。また、母親に叩かれ水をかけられたエピソードや、母親の無神経さについて話して泣くが、そのように感情を出し始めると、次の回には「意味がない」と前回の話を打ち消した。Aにとって内的な世界を見つめることは「しんどい」ことであり、その作業を進めることへの抵抗が始まったものと思われた。面接に来ることについて「利用している気がする」とAが繰り返し語るのも、<人に頼るみたいで嫌なのかしら>と聞くと、「そんなに殊勝ではな

い。自分を見て欲しくてオーバーに言い、すぐに甘える」と語った。Thに甘えたい気持ちがAの中に生じてきたが、甘えを出すことへの不安を語っているであろうとその気持ちに共感すると、「自分から出てくるものを待ってみようという気持ちになってきた」と語り、僅かばかりでも甘えの方向に心が動いたようであった。

しかし次の回には、好きだったラジオ番組が急に打ち切られ、寂しかった話をして、「何時までも変わらない確かなものが欲しい」と、愛着をもったものから自分が見捨てられる事への不安を語った。Thに近づきたい気持ちと、近づいて見捨てられることへの不安を取りあげると、「自分でも本当の事がわからない、テンポが違う。ここが早い」と、Thとの関係のズレを語った。それに対してThが<話し合って修正できると思うが>と言うと、あっさりと「そうですね、今までこんな状況になると逃げていた。本当はテンポの違いをここをやめる口実にしようと思っていた」と述べた。Thに依存感情を持ったことで見捨てられ不安が生じ、捨てられる前に自分から捨てようと思っていたようであるが、Thとの間でその思いが共有されたことに安心したのか、「相談室を勇気がなくてできなかったことの『練習の場』にしたかどうかと考えた」と語った。面接場面に留まり、逃げずに自分自身と向き合うことを決心をしたものと思われた。

第2期（#13～#48） 内的世界を表現し始め、Thとの関係が安心できるものになる

Thの都合で面接開始時間が10分遅れると、「やっぱりここに来るのは甘え」と、依存が満たされない事への不満と、見捨てられ感情を表現した。そして「自分は強い人へは従順、弱いものへは傲慢」と言うのでくここではお母さんに対するのと同じ?>と聞くと即座に「そうです」と答えた。面接に遅れて、Aを10分間放置したThは、無神経な母親のようにAには感じられていたよ

うであった。14歳頃から家族との食事が美味しくないと感じていたAは、皆と食べた後夜中にもう一度食べ直し、過食していた。Aにはそれが本当の食事という感じだったが、母親からは「意地汚い」と食べ物を隠されたという。食事も生活も義務的だった事や、母親のいないところで妹の髪の毛を切るなど悪いことばかりしていたと語った。そして今も外食は苦手で、人との食事後に一人で食べ直していることを話した。また、Aが「土曜病」と呼ぶ、他の下宿生がボーイフレンドと外食に行く土曜日に、1人で食事をするのが嫌だと感じている事を語った。

この頃、母親の入院の為に帰省する。母の言う事にビクビクして嘘ばかりついてしまうが、一方で母に沿おうとする自分もいて母を手放せない、「どうしたら「個」になれるか」と語った。この頃以下の夢の報告があった。

夢1；{鳥の剥製のフライを男1人、女3人で批評する。決まらないので地下の中華料理店に持っていく。店の人を呼ぶために「虎」「あ」と何度も大声を出しても疲れなかったが、ボーイが来たときは救われた気がした。2人で地下室の奥に入るが明るい感じがした。どンドン歩くと野原に出る。大地の上には家がある。そこでは昔何か事故があったと人に聞いたのに良い気分だった}

この夢から、Aにとっての食べ物は食べられた代物ではなく、鑑賞や批評の対象となるような遠い存在であることや、Aが良いものを取り入れられなかった事を伝えているように思われた。大声を出すことからはAの身体の動きが感じられた。2人で地下に入っていくというのは、ThとAのこれからの面接のプロセスを暗示していると思われた。

冬休みに帰省し、母親がAの世話を焼くと父親と妹が拗ねる事に初めて気づく。この頃大学院入学が決まり、大学卒業後も面接を継続することを確認した。

「カフカの変身を読んで虫になりたかった、マ

ゾヒズムの傾向がある」というAにく虫っていうのは自分の醜い面とも思えるね」と返すと「ひやりとした事を言われたらどうしようかと思った」と語った。Aの中に何か隠されたものがあるように思われたが、無理に引き出さず、出てくるまで待とうという気持ちでいた。Thの都合で面接が急に休みになると、再度「利用している」という訴えが復活した。ThがAを抱え損ねると、Aは「怒るよりすり替える感じ」と言い、Thの不在から生じた寂しさや怒りの感情をThにぶつける代わりに「利用している」と訴えることで、Thが見捨てたのではなく、自分がThを搾取している話にすり替えたのである。それは受け身的に捨てられる体験を主体的な体験にすり替える、Aの心的防衛の有り様を示していると思われた。

その一方で、Aは以前より感じた事や思った事を表現することが増え、友人から「陰気なAが強くなった」と言われる事を話した。また「食べたいものを食べただけ作れるのが良い」と、手作りの弁当を皆と一緒に食べるようになった。

夏休みに帰省すると母親が変わっていたと言う。人のせいにせず、「自分がやれなかったんだ」と言ったのには驚いたと語った。夏休みの後のセッションでは、「自己主張をしたみたいで気持ちいい」と化粧をして来談し、他人に対して初めて「NO」と言えたエピソードや「欲しいものを欲しい」と言えるようになってきたことを語った。また、幼児が何かするとき、母親の確認を求めるように、Aは自分の言動や感じた事についてThに確認を求めるようになった。そして「4月頃のしんどい話を言わなきゃいけないんですけど・・・」と語った。

第3期（#49～#99）性・自己・身体への気づき

「今日は花を持ってきたかったんです」と小さなベゴニアの鉢を持って来談したAは、「体調はどうですか？話の後に悪くなったら困るし」と言

いながら、軽い調子でAのこれまでの男性関係について話した。1人はたまたま電話をかけてきた、あだ名しか知らないホストをしている男性で、2~3ヶ月に1度sexをするだけの関係であった。2人目は3か月前まで付き合っていた街で声をかけてきた男性。今の彼Bは「土曜病」を解消するためにAが誘い出した女友達の兄だという。Thがどんな気持ちで付き合っているのかと聞くと、「sexへの興味と親への当てつけ」とこともなげに答えた。Thはその話を聞いている間はAの語り口によってしまい、軽い調子で受け取ってしまっていたのであるが、Aとの面接が終わった後で、徐々に気分が重苦しくなり、虚しいような、悲しいような、やるせない気持ちになっている自分に気づいた。そしてこの感情がAからThに投げ込まれたものであることを理解した。よく見るとベゴニアの茎や葉の裏にはアブラムシがびっしりと張り付いており、花は萎れかけていた。「sexへの興味と親への当てつけ」という言葉と、このベゴニアの対比は、Thには痛々しく切なく感じられ、文字通り男性という「虫」の付いたAの身を清めるように、毎日アブラムシを拭き続けた。それは、面接の中でAの躁的防衛に乗ってしまい、Aの哀しみを受け止め損ねたThの償いでもあった。

次のセッションにやってきたAは、この話題には全く触れようとせず、高校時代の質素な弁当や、継ぎ当てる靴下を履いて登校するように母に言われて恥ずかしかった事を涙ながらに話し、「母がわかってくれない！言っても駄目！言えない！」と訴えた。「わかってくれない！」という母親への怒りは、前回Aの躁的防衛に乗ってしまい、その裏側にある気持ちを受け取り損ねたThへの怒りでもあると理解した。また、Thに男性関係の話をした事を、Aは恥ずかしく感じており、惨めな気持ちになっているのであろうと思われる。さらにAは、昨年（2期）から過食をしており太りたくなくて下剤を飲んでいたが、

今年の5月頃に辞めた事を話した。<Aさんの中には、食べずにいられないような虚しさとか、穴の開いたような感じがあるのね>と、前回Thに投げ込まれた感情と下剤の話を重ねて伝えるとAは黙って頷いた。

これまでは、母親を非難をした後で、「愚痴を言っても仕方ない」「意味がない」と母親への攻撃を否認していたが、この頃からは母親に対する憎しみや否定的感情を隠すことなく表現するようになった。そして箱庭〔写真3〕{海に向かって恐竜が吠えている}を作った。



写真3 箱庭 {海に向かって恐竜が吠えている}

この箱庭は、今まで抑圧し続け、吐き出すことの無かった母親への怒りを、母なる海に向かってぶつけているように思われた。また、実際に身体の奥から声を絞り出すように泣き、「大事なぬいぐるみを燃やすように言われ、嫌だと言えなかった！母を憎む！」「型にはめられ、ペットのように扱われてきた！」と全身を打ち振るわせて号泣する一方で、「彼が自分の外にいる感じで寂しい、一体になりたい」としんみりと語った。母親を攻撃することで母親との分離を感じると、独りぼちの不安を感じて一体感を希求し、代理の対象を求めるAの姿がある。

冬休みに帰省したAは、「親と話してもわかってもらえない、どうでも良くなってきた」と投げやりに話した。（この時、以前の男性と関係を持っていたことが、3期の終わりに明かされた）

箱庭〔写真4〕〔コンクリートと体液〕を作る。「右は人工的、セメント。左はゲル状、体液。左は右に行けるが逆は駄目。セメントが何か別のものに替わらないといけないのかな」と語った。Aの内的世界が大きく変動しようとしていることが窺えた。



写真4 箱庭〔コンクリートと体液〕

「コンパの席で、sexの話ばかりで嫌になった」と言うので、Aが性をどのように体験しているのかと聞くと、「母への当てつけ」と即座に当然のように答えた。〈お母さんを攻撃するつもりで、自分が一番傷ついたんだよね〉と返すと、「感じないようにしてきた。傷つくというのがよくわからない。やるせなさはあったが、押しつけられた訳じゃない」ときっぱりと語った。しかしその後のセッションで、一人で夜の時間をやり過ごせない主人公が出てくる映画、『Mr.グッドバーを探して』の話をして、「ホストとのことは体は別のもので、性欲を満たすためだった。傷ついたとも感じなかった。主人公も体が自分のものじゃない。本当に自分というのがない」「自分の手という感じがしない」と自己感や身体感覚のなさを語った。男性との関係は乖離したものであり、Aの身体がA自身のものになっていないことが窺えた。

「重たいが右にあって寂しいが左にある。風が吹いている感じ。原因がわからない寂しさ」と語り、これまで感じないように防衛してきた虚しさ（抑鬱感情）を心の中に感じ取れる面が出てきた

ようであった。この頃以下の夢が語られた。

夢2〔崖っぶちで海を見る。ジュゴンが呼ぶので気をつけてくださいの看板。怖くなってお尻をつけて下りる〕

夢3〔男の人と2人で海に潜り、魚や海老を捕る。食べようとするが冷凍を戻したみたいだったので、代わりにハンバーガーを買って食べる〕

取り込まれることを恐れて近づけないでいた無意識の海に恐る恐る近づき、ついに海に潜って魚を捕れるまでにはなったが、まだそれを取り入れるまでにはいかないようである。

Aは男性Bとの関わりの中で、今まで、思いを言うことは相手に要求することと同じだと考えていた事や、怒られることは嫌われることだと受け取っていたことに気づくようになる。また、冷凍食品を使わずに食事を作り、部屋のインテリアにこだわるなど自分自身の生活を大事にしようとし始めた。小さい頃の母親との記憶が蘇り、「母の期待したことと、自分のしたいことが違ったが、「NO」と言えなかった。関係のあり方が悪かったのか・・・」と静かに泣き続けた。夢の変化に呼応するように、母親との関係を語る語り口もしんみりした口調に変化した。そして、夢4〔母と妹のいる家から引っ越している。母の使っていた圧力鍋は置いていく〕が語られた。無意識の世界では母親との分離が進展していることが窺えたが、友人が母親と冗談を言い合う姿を見て、「自分には一生得られないもの」と涙ぐんだ。Thがく幼いAが欲しいものを得るには母親に頼るしかなかったかもしれないが、今は自分で生み出す力を持っている〉と言うと、「皆そう言うんです！何で言わなかったんだって！おなかの空いたと言って叱られるのに、言えるわけじゃないじゃないですか！」と泣きながら怒鳴った。今までは依存する対象を失うのが怖くてThに言い返すことができなかったAが、初めてストレートに怒りをぶつけることができた。この体験の後、AはBや年上の女性にも自分の思っていることや否定的な事も言え

るようになり、他の対人場面での自己表現へと広がりを見せた。しかし、夢5〔海辺の水族館。女友達と2人で立っていると、ジンベイザメがやってくる。女友達が「怖くないよ」とヒレに触るが、自分は怖くて震えている〕と、まだまだ飲み込まれる不安は強いようであった。以前よりは母親との距離は取れたが、実家に帰ると「母親のペースに飲まれそう」だと語った。もう少し自分が固まってからと考えて「正月は帰らない」と母親に言う、即座に「そう、仕方ないね」と応えたと話し、「母とはテンポが違う」とはらはらと泣き出した。母親のそっけない返答は、幼児が「抱っこ」と「下りる」を繰り返して要求する再接近期(Mahler, 前出)に、「下りる」というと2度と「抱っこ」してくれない母親の態度を連想させた。主体的な言動をすれば母親から見捨てられる為、Aは母親の思いを取り入れて自分を空しくしてきたものと思われた。おそらくこのような母子間のズレが小さい頃から繰り返されてきたのであろう。

妹の大学が推薦で決まった事について、母親がお金を使わなくて良かったと言うのを聞いたAは、自分がお金を沢山使った事への当てつけだと感じ、「お金を返せと言うこと？」と言うと、母親は否定し親子・家族の繋がりのお話をしたと言う。それに対してAは「自分は個でいたい」と語った。父親とは「人間対人間」だが、母親とは「母と子」というAに、<「お金を返せというの？」というの「個の関係だというの？」>と言うことだね。でも違うと言われて嬉しかったのね>「はい」<「帰らない」つまり「私は個でいます」>に対して、お母さんが「そう」と個であることを認めると不安になったのね>と、分離の問題についてThが介入すると、「えっ！そういうことになりますね。でも・・・」と泣き崩れ、「今、それに向き合うのが辛い・・・自分が離れられなかったことになる」と泣き続けた。次のセッションでAは、「原因を考えても意味がない」と繰り返した。Thが黙っていると、「逃げかな、向き合う

のがしんどいから。でも何のために今までここに通ったのか・・・」と言った後で、「あっ、自分のせいだと気づくためかもしれませんね」と語った。その後、親のせいにしていた過食も、「自分の身体だから太っても自分の責任」と思って食べていると話し、「今までは別のものが太るような気がしていた」と語った。就職が決まり、Aとの面接は卒業までの数回となる事を確認した。

第4期（#100～#105） 苦痛な過去の想起・ 身体が自分のものになる

冬休みに帰省した時、母親が細かく世話を焼き「気がつく食べ物をお口までもってきていた」事を楽しそうに話した。この1年間に自分の中で起きたしんどさについて母親に話したが、母親は「自分で出来るようになると親を捨てるのか！」と、育て方を批判しているを受け取り口論になったという。母親からの承認を得られなかったAは、「どうでもいい気分になって」フェリーで知り合った男性C(大学生)の下宿について行ってしまう。Aはそこで風邪を引いて寝込むことになったが、Cが当たり前のように看病してくれたことを泣きながら話した。Cに「sexしたいならいくらでもすれば」と言うと、彼がショックをうけて泣き、そのやりとりから自分がsexについて自虐的になったり、自分を貶めるところがあることに気づいたと言う。そして、小学4年の時泊まりに来ていた従兄弟(小学6年)に性的イタズラをされたことを想起した。「同じ家にいながら母親に守られなかった」と号泣し、自分は汚れているので結婚はできないと思っていたと話した。

次のセッションでは、1週間動き回っていた事を話し、「動くのを辞めたら前みたいになりそう」と、性的外傷や母親への感情を躁的に防衛しようとするAに、Thが心の痛みを感じながらも<前の話をずっと抱えていた>ことを伝えると、Aは「見たくない、自分でも忘れていたこと」と1度は否認したが、<私も辛かった、でもAさん

が自分の身体と思えなかった事とも関わること、ゆっくり話していきたい>と伝えると、不安定で過食してしまったことや、前のセッションの後、性的外傷体験がCとの間で再演されていたことが語られた。彼が怖くなり身体がガタガタ震え、身を固くして彼を見ないように目を塞いでいたが、その間Cはそととして、長い時間をかけてゆっくり話を聞いてくれたと言う。何かで笑ってから、Cを人間として見られるようになったことを話した。CはAを脅かしたり辱めたりすることなく、「僕はどうしたらいい？」とAを抱えてくれていたと言う。

この次のセッションに、Aはバラとかすみ草の小さな花束をもって来談した。ThはAの自己イメージが変化したことを感じ、<Aが前にもってきた花には、アブラムシが沢山ついていて、殺虫剤をかけると枯れそうなので毎日拭っていた。でもなかなか良くならないので殺虫剤をかけると枯れてしまって>と謝り、<初めに思ったように、ずっと拭いていれば良かった>と言うと、Aはしばらく沈黙し、「人の思いが嬉しい、繋がりも」と語り、「一人で立って自分を大事にするには、自分で自分に手をかけてやることなのかな」としみじみと語った。

最終回の面接でAは、「あー自分なんだという感じで、身体が自分のものになってきた気がする」と言い、食べ物が美味しく思えるし、自分に美味しいものを食べさせたいと思えるようになったと話した。自分の欲しいもの大事なものは、「人を信じることと繋がっていくこと。身体で埋められるものではないということがよくわかった」と語った。Thから卒業を祝う意味で花を贈り、<私もいろいろ考えさせてもらった>と言うと、「自分だけがドタンバタンしていたと思ったけど、あーそうかましれませんね。でもThという人間と話をして、関係を持ったんですものね」と語って終結となった。

IV 考察

(1)「食」—心的取り入れと排泄—

1. 食べ物が意味すること

Aの語った食べ物は、剥製のフライという食べられない代物が、豊かではないが空腹を満たす冷凍やファーストフードになり、その後冷凍食品を使わない食事へと変遷した。それにもなってAの意識も、食べ物を美味しいと感じるようになり、美味しいものを食べたい、自分に食べさせたいへと変化した。母親との関係では、「お腹が空いた」と言って叱られた体験から、「食べ直し」、「母親の質素で恥ずかしい弁当」となり、「圧力鍋を置いていく」「食べ物を口に運ぶ母親」へと変化した。これらは摂取する内容物と、摂取する時の関係性の変化、摂取することへの内的イメージや意識の変化を顕していると思われる。

赤ん坊への授乳が単なる栄養の摂取だけではなく、母親の温もりや柔らかさ、自分を包み込む空気などを含む行為であるように、そこには関係性が大きく作用する。また食べる行為とは、自分の心は何を取り入れるかといった心理的なテーマとも関わっている。Aの話を比喩的に受け取るなら、本来心的にも身体的にも自分を満たすべくAに与えられた食べ物は、死んで干涸びた剥製のフライであり、生身の暖かさや温もりのないものであったことを示している。加えてそれは食べるためのものではなく批評される対象である。

「お腹が空いて叱られた」体験は、Aの内界(身体を含む)を満たすもの、つまり愛情や良いものが不足していたことや、自己の内側を満たしたいというニードが批判され拒絶されてきたことを顕していると思われる。“母親の乳房と母乳に対する子どもの早期の愛着は、人生におけるすべての愛情関係の基礎である”(Klein, 1975/1983)と言われるが、Aの内的世界では、食べ物が母親の愛情と等価物であったと考えられる。

食べ物の語りの背後にある心的意味を考えるな

らば、母親から十分な食事（愛情）が与えられないと感じていた A は、「食べ直す」事で自ら欲する美味しい良いものを自己に取り入れようとしたものと思われ、「母親の質素な弁当」は、空腹は満たされるが情緒的に満足するものではなく、母親からの情緒的な豊かさや、こまやかな心配りが与えられなかったことを顕しているのだろう。「圧力鍋を置いていく」夢は、無意識の世界では母親との距離が出来はじめたことを示しており、「食べ物を口に運ぶ母親」は、A を幼児扱いする母親の存在や、離れようとする A に母親が近づいて来ることを伝えている。同時にそれを嬉しそうに話す A の姿からは、まだ母親に依存したい気持ちがあること、今まで叱ってばかりであった怖い母親イメージが、自分の世話をやく良い母親イメージに変化したことを示している。また、口に運ぶ人と、運ばれる人という関係への気づきは、自他の分離が進んできたことを顕していると考えられる。

2. 過食が意味すること

A. Freud (1947/1984) によれば“食物と母親”は同一視されるという。そうであるならば、A は過食によって母親を取り入れ、下剤によって母親を排泄したことになる。満たされた食事（母親体験）をもてない A は、過食によって食べ物をむさぼり食うことで空腹を埋めようとするが、食べ物（母親）を取り入れることは、内的には母親を取り入れ合体することであり、自身の自立性や自分という存在を脅かされることになる。そこで下剤を使って食べ物（母親）を排泄し、自立性を再獲得しようとしたと考えられる。「食べたいけど太りたくない」は、《甘えたいけど頼りたくない》《自立したいけど離れたくない》といった気持ちの表れであると思われ、再接近期（Mahler, 前出）の幼児が抱える《母親に近づきたいけど離れたい》と同様の両価性の中に A の心が捕らわれていたことを示している。

A は幼少期から空腹や吐き気を吐かれたと語っており、幼い A が自分自身で対処できない身体的・生理的な苦痛や不安を、母親から抱えてもらえない関係があったことが窺える。下坂は（1988）“母親からの反応が期待される場面で、適当な反応が得られないといった心的外傷体験が、摂食障害者の実感の乏しさや、空虚感、無力感を生み出し、この欠陥を埋めようとする試みが「食べること」である”と言う。また松木（2006）は過食の病理を、乳幼児期の母子分離の不十分さが、幼少期に起源を持つ自信のなさや孤独感、無力な絶望感を生じさせ、その心に置いておけない心的苦痛（抑うつ感情）を食べ物で満杯にすることで排除しようとする行為や行動であると述べている。幼少期に十分な母親との一体感を体験できなかった A の心に、上述されたような空虚感、孤独感といった苦痛な感情が生じていたとしても不思議ではない。A は自身に不足している母親からの愛情や依存の代理物である食べ物を過食することで、心的苦痛を排除しようとしていたと考えられよう。

3. 一人での食べ直しが意味すること

14 才という年齢は、身体の成長・成熟により自己の身体イメージが変化するとともに、性衝動などの欲動が活性化し、心理的には親との分離や自己の確立へと向かう年齢である。この時期から始まった「人との食事が嫌」「一人での食べ直し」という行為は、A にとっては必然の行為であったと思われるが、それはいかなる意味をもつものであったのだろうか。

母親の作った食事ではなく、一人の空間で取り入れた食事が「本当の食事であった」ということは、母親から与えられるものでは満足できず、その不足を自分で補い自分の内側に良いものを取り入れ、保持しようとする試みでもあったと言えよう。

然るに、A は親との食事を全く拒否したのではなく、親との食事をした後で一人食べ直してい

る。それは A が母親と一体の世界を手放すことなく、自分本来のニードを満たす食事を取ろうとしていたことを顕している。A の行為は、母親の器の中に居ながら、その中に自分の器を入れ込むような「入れ子状の 2 重構造」を作っていたと言えよう。その構造はどこまでが自分で、どこからが母親かを曖昧にさせるものであり、実感をともなった自己の形成を防げていたと考えられる。

滝川 (1978) は食事について“家庭の表象であり、家族以外に対しては隠されたものという「私性と秘儀性」を備えている”と述べている。そうであるならば食べ直しの食事は、家族が持つ「私性と秘儀性」の中に、A が自分だけの「私性と秘儀性」を持ちこもうとする行為でもあったと言えるのではないだろうか。

幼児期から児童期にかけての A は、「怒られることは嫌われること」と感じており、母親の対応に不全感を感じつつも従順な良い子として母親に従属していた。おそらく怒られることは母親から見捨てられる事と同義であったのであろう。A は見捨てられないよう母親に自己を差し出し、そうすることで母親との愛着・一体感の世界を感じていたものと思われる。A は、退行的・服従的であると愛情を与えるが、自立的・自己主張的であると愛情を撤去する母親イメージ (Masterson, 前出) を持っていたのではないだろうか。そこには自分の欲求を満たさない悪い母親と悪い自己、一体感をもてる良い母親と良い自己という、分裂した対象像と自己像が存在していたと思われる。そして妹の髪の毛を切るような悪い子の A は母親の目の届かない所に隠されていた。身体的成熟によって心的構造が変化する思春期を迎えた A にとって「食べ直しの食事」は、母親との一体感から抜け出し、自己を母親から分離しようとする試みでもあったと思われる。

言い換えると、A の主観的世界では「自分としての自己」と、「母親のための自己」の両方をもっていただと思われる。「母親のための自己」か

らみれば、母親に従順な自己は「良い自己」であるが、母親から分離し主張する自己は「悪い自己」となる。しかし「自分としての自己」からすれば、前者は「悪い自己」であり、後者は「良い自己」である。A は分裂した 2 つの世界とそれぞれに分裂した自己イメージをもっており、その中で「自分としての自己」を主張しようとするものの一つが、「一人で食べ直す」行為であったと思われる。上述してきたように、一人での食べ直しは、自己の内側に良いものを取り入れ保持しようとする試み、自己を母親から分離する試み、「自分としての自己」の主張といった意味を内包する行為であったと考えられる。

(2) 「性」— 身体をつなぐこと切り離すこと—

1. 性的問題行動の意味

親元から離れた大学に通うことで A は物理的・身体的には母親からの分離を果たした。また下宿に引きこもり内閉する行為は、A が自己の外側に境界膜を作り、外からの刺激を遮断し主体的な自己を作ろうとする意味をもっていたと思われる。しかし心理的分離は達成されず、内閉する行為は、内的には中学時代の「食べ直しの食事」の反復であり、高校時代にボーイフレンド作ったことの反復は、母親への「当てつけ」の性的問題行動として繰り返された。

名前も知らない相手との性関係は、A が性的対象を全体対象と認知していないことを示している。成熟した性的関係とは、心と身体が統合された中で行われる行為であるが、A は心と身体を分裂させ、情緒的なものを排除した身体だけの関係を男性との間で持っていた。自己の分裂だけでなく、心と体も分裂させていたことがこの行為からも窺えよう。この自己を 2 つに分裂させるやり方は、A のパーソナリティの特徴であると思われる。

物理的・身体的な分離はできても心理的には母親と一体化した状態にある A は、その状態から

自己の個別性を立ち上げるために、つまり男性との肉体的な結合状態にあっても2つの人格が融合しないで「個別性」を持っていられることを示すために、部分対象である男性との性行為が必要であったと言えるのではないだろうか。それは母親に呑み込まれていることを否認し、主体的・自立的な自己を確立していることをA自身が確認(錯覚)するための行為でもあったと言えよう。Winnicott (1964/1998) は、青年期女性が母親との親密性を防衛するために行う、“融合とそれに対する防衛”について論じている。その性行為は、相手に影響を与えず、お互いが自分の個別性を失わずにいるための行為であり、相手が好きであるとかセックスをしたいという理由ではないという。Aの場合、自分が母親の言うままになると、母親に呑み込まれ一体化するようになっており、「融合」とまではいかないにしても、Winnicottが描写した事例と類似の心性が働いていたと言えよう。

性体験を「母への当てつけ」と言い、「身体が自分のものじゃない」と感じるAのあり様は、内的対象イメージだけでなく身体も母親と未分化なものであることを示している。対象関係だけでなく、Aの身体も「自己」でありながら「母親」であるという「2重構造」になっていたと言えよう。

半身は母親のものである身体を使って、名前も知らない男性と性行為を行うことは、その行為によって半身の持ち主である母親を汚す、罰するという攻撃的意味を持っていたと考えられる。しかし攻撃していることが露呈すると母親から見捨てられる不安が強まるので、母親には従順に振舞うというウロボロスの円環が生じていたものと思われる。半身を母親への当てつけとして差し出した性行為を行った時、もう半身の持ち主であるAは、Thが逆転移として感じたような、虚しさや哀しさを感じていたのではないだろうか。しかしその感情は過食によって心から排除され、下剤に

よって身体からも排泄されていた。

Aの男性対象選択は、Aが自己の内側を見始め母親への不満を語り始めた頃から変化していく。名前も持たない男性から、友人の兄という名前も身元もわかった対象Bへと移行し、その後Cという自分の中の「悪いもの」も「良いもの」も表出できる全体対象となる相手を、Aの無意識は選択していった。外傷体験の再演が、Thの代理対象であったと思われるCによって受け止められたことが、「汚れてしまった価値のない自分」という呪縛からAの自己を解放することを可能としたと思われる。Aが持参した「バラとかすみ草の小さな花束」は、Aの心的自己像だけでなく身体像も良いものへと変化したことを顕している。

(3) 母親からの分離—精神が身体に住み着く (人格化する) こと—

母親から分離していくことは、母親を喪失することでもある。Aは母親から離れて主体的に自己の世界を持つとしようとするが、母親との愛着関係を失うことを怖れて再度母親に従属する。そうすると「母親のペースに飲まれそう」と、文字通り母親に呑み込まれて自分を失う不安が生じるため、再度母親から分離しようとするのが繰り返されていた。Aは母親を手放せない代わりに、自分自身にもなれないでいたのである。“母親からの分離意識が「分離不安」を、また情緒的接触希求が「呑み込まれる不安」を生み、それらが「見捨てられる(愛情喪失)」か「共生世界への埋没」かという深刻な葛藤になっていく”(齊藤, 1993)世界が、まさに展開していたと言えよう。

女の子が母親から分離することの困難さについて、Mahler(前出)は、“性差を発見した女の子は母親の元に帰り、母親を非難し、母親に要求し、失望し、にもかかわらず、両面的に母親に結びつけられる傾向がある”という。齊藤(1993)も、“母親との原始的同一化を基盤に、同一化対象

(負の自己感情を起こさせる対象ではあるもの)の変更なしに進められることが、女兒の母親からの分離を難しくしている”と述べている。青年期女性が母親から第二の分離个体化をする際の難しさも同様であると思われる。

思春期から青年期にかけての誰もが体験する、再接近期的な《甘えたい・離れたい》という両価的な欲動の中で、親への反抗を繰り返し内的な親殺しをして自立に向かう一般的な青年とは異なり、Aは「母親と繋がった中での自立」や「母親から呑み込まれた中での出立」を幾度となく繰り返しているように思われる。そこには、Thの不在時に生じた見捨てられ不安や怒りを、「利用している気がする」と罪悪感にすり替え、喪失の哀しみを否認するAの心的防衛の特徴がみられる。喪失の哀しみを内的に抱えることができないので、母親を手放すこともできないのである。

空腹や吐き気といった身体的・生理的欲求を受け止めてもらえず、それ以降「私」を主張することをやめてしまったAは、「私である」という中核となる自己を育て損なっていたと言えよう。また「母親に呑み込まれる」「自分の身体が太る気がしない」という語りや、母親への当てつけの性行為が示すように、精神的自己感だけでなく身体的自己感も曖昧なものになっていたと思われる。Winnicott(前出)は、現実を感じ取るためには、「私は・・・である」という主張と「私はなんであるのか」という疑問を持つことが必要であり、精神が身体に住み着いた「私」の生成が不可欠であるが、それには母親に備わった身体的・生理的なものに基づく情緒的な関わりが必要であると述べている。Aが身体や自己を自分のものと感じ取れなくなった要因が、母親との情緒的な関わり不足に根ざしたものであることが示唆されている。

子どもが内的世界を保つためには、“内側と外側という身体図式をもたらす「境界膜」が必要”であり、この“境界膜によって摂取や排泄が意味を持つ”というWinnicott(1981/1984)の主張は、

Aがバウムテストや風景構成法で描いた「境界線」を思い起こさせる。母なる大地と地上の間に引かれた境界線は、母親との共生の世界に埋没する自己を母親から分離しようとするものであり、主体的自己を守ろうとする保護膜であると考えられる。また母親との食事の後に、自分の食事を食べ直すという行為や性的問題行動も、「私であるもの」と「私でないもの」の間、つまりAと母親の間に作ろうとした「境界膜」であったと言えるのではないだろうか。

しかしAの場合、まるで子宮の中から生まれ出ようとしない赤ん坊のように母親から離れることなく、母親の子宮の中で自分を包む境界膜を作ろうとしていた。そのため、境界を作ったとしても飲み込まれた状態であるには変わりなく、自他の区別が明確なものにはならず、精神と身体を含む「私は・・・である」をつかめないままであり、排泄も取り入れもできないでいたと考えられる。

初めは母親を非難するも、すぐにそれを否認していたAであったが、面接が進展するにつれて「恐竜が吠える」箱庭を作り、身体の奥から声を絞り出し、泣きながら母親への怒りの表出ができるようになった。これは内的空想として身体の内側に保持していた母親を、言語表現によって体外に排泄することが可能になったことを示している。Winnicott(前出)が、“攻撃的行為は青年にとって、精神と身体を結びつけるのに価値あるもの”と述べているように、怒りの表出がAの「私である」ことの輪郭(境界)の形成に寄与したと思われる。この後、Aは母親を怖れつつも、「母の期待したことと自分のしたいことが違った・・・」と、自分と母親を分化したものとして語れるようになった。

帰省をめぐるやりとりとお金を使う話へのThの解釈、<「帰らない」つまり「私は個でいます」に対してお母さんが「そう」と個であることを認めると不安になったのね>は、Aが感じている「呑み込む母・離してくれない母」という内的な

対象像に対して、離れようとしなないのは A 自身であるという現実と直面させる介入となった。この辛い現実には A は泣き続けたが、その後自分が母親を手放せなかったことを受け入れ、「自分の身体だから太っても自分の責任」と語れるようになり、身体を自分のものとして受け入れるようになっていった。「自分の身体」の認識は、「自分ではないもの」、すなわち母親との違いを明確にすることとなり、A の心に内と外、自と他の区別をもたらした。そして内的世界を自分のものと実感できるようになったのである。

母親との分離がある程度進み、自分の中に精神と身体が住み着き始めたことから、A にとってもう一つの課題であった「性的外傷」が意識に浮上してきたものと思われる。そこには Th の代理物である C 君の存在が大きな役割を果たした。女性としての傷付きを C 君によって抱えられた A は、「あー自分なんだという感じで、身体が自分のものになってきた気がする」と語れるようになり変化した。これは Winnicott が“精神が身体に住み着く”と表現した「私がある」ことが可能になったことを示しており、Mahler のいう分離個体化が達成された事を顕していると考えられる。

V おわりに

本論では、過食や下剤の使用、性的問題行動を繰り返した青年期女性が、母親から精神的に分離していくプロセスを、食、性、身体イメージの変化という観点から考察した。

クライアントは面接のプロセスを通して、その行動・行為の背後にある不安や虚しさを自分のものとして体験し、受け入れられなかった身体を己のものとして引き受けられるようになり、「私である」ことを獲得していくことが可能となった。

クライアントは、他者といると「私である」ことができず、「私である」ためには他者から遠ざかるしかなかった。しかしそうすると孤独になる

ので、孤独を回避するために他者に迎合し、「私である」ことができない、というパターンを繰り返していた。そこには、自己主張・過食・性的問題行動によって母親から距離を取る「悪い私」と、従順に母親に迎合する「良い私」という分裂した自己像と内的対象関係が存在していた。面接を通して、この「悪い私」と「良い私」の両方をセラピストとの関係に持ち込むことが可能となり、分裂した自己像を統合するとともに、クライアントはセラピストという他者といても「私である」、すなわち他者と交流しつつも個別の存在として「そこにいる」ことが可能になったのである。母親を攻撃する「悪い私」を、Th との関係の中に吐き出すことで母親との間の境界を形成し、それがクライアントの「私である」ことを促進し、さらにそれが母親との分離を促進していくというように、分離に向かう運動が展開する中でこの変容は成し遂げられた。

また、母親と一体となった未分化な身体的自己をもったクライアントの内的世界には、自己の内部に摂取された母親対象が物理的に存在しているかのような状態であった。クライアントはその体内化された母親対象を自己の身体から排泄することによって、内的な母親対象を心理的に喪失し、その動きと連動して新たな対象を取り入れると共に、関係を繋いでいくことが可能となった。

食や性が絡んだ症状や問題行動の基底には、心理的自己だけではなく、身体的自己から母親対象を分化するための、取り入れや排泄に関する内的空想が存在していると考えられる。母親の子宮の中に居るかのような内的空想は、分離に伴う悲哀の感情を否認することに役立った。また子宮という安全な場に身を置きつつ母親対象を身体的に排泄し攻撃する行為は、自己の主体性の獲得や母親との分離を果たしているという錯覚をクライアントにもたらした。しかし、現実との接点を欠いた内的空想の世界での分離の試みは、真の自己の生成をもたらすことはなく、分離—個体化も達成さ

れることはなかった。その結果と空想のひずみから生じる不安や不全感が症状となっていたと理解された。

“本来自己とは異質の存在性格をもつ身体を「所有」することにおいてしか、自己として現実「存在」することができない”(木村, 1978)と言われるように、「私である」ことを実感するためには、自己の身体を我がものとして体験することが不可欠である。我々セラピストは、身体と結びついた内的空想への理解を通してクライアントの自己像や内的対象関係に接近するとともに、身体的自己と精神的自己を繋ぐ媒介となり、「私である」ことの生成を支える対象として機能することが求められるのではないだろうか。

付記

本稿をまとめるにあたり、ご助言いただきました京都大学大学院教育学研究科 臨床心理実践学講座の松木邦裕教授に感謝申し上げます。

文 献

- Blos, P. (1962): On Adolescence: A Psychoanalytic Interpretation. The Free Press of Glencoe. 野沢栄司訳 (1971): 青年期の精神医学. 誠信書房.
- Bros, P. (1967): The second individuation process of adolescence. *Psychoanalytic Study of Child*, 22, 162-186.
- Davis, M. & Wallbridge, D. (1981): Boundary and Space. 猪俣丈二監訳 (1984)情緒発達の境界と空間—ウィニコット理論入門—. 星和書店.
- Erikson, E. H. (1959): Identity and the Life cycle. International Univ. Press, New York, 小此木啓吾訳 (1973): 自我同一性. 誠信書房.
- Freud, A. (1947): The Writings of Anna Freud. Volume IV. International Universities Press. 牧田清志・黒丸正四郎監修 (1984). 児童分析の指針 (下) アンナ・フロイト著作集第6巻. 岩崎学術出版. 88-98.
- 廣井いずみ (2003): 第2の個体化期において「橋渡し」としての父親を体験すること. *心理臨床学研究* Vol. 21. No. 5. 484-495.
- 乾吉佑 (1980): 青年期治療における“new object”論と転移の分析. 小此木啓吾編. 青年の精神病理2. 弘文堂. 249-276.
- 木村敏 (1978): 思春期病理における自己と身体. 中井久夫・山中康裕編. 思春期の精神病理と治療. 岩崎学術出版. 321-341.
- Klein, M. (1975): The Writing of Melanie Klein Vol. 3. LOVE, GUILT, AND REPARATION AND OTHER WORKS (1933-1945). The Melanie Klein Trust.: 西園昌久・牛島定信訳 (1983): 愛, 罰そして償い. 誠信書房. 75-122.
- Mahler, M. S., Pine, F., & Bergman, A. (1975): The Psychological Birth of Human Infant. New York: Basic Books. 高橋雅士他訳 (1981): 乳幼児の心理的誕生. 黎明書房.
- Masterson, J. F., (1972): 成田善弘・笠原嘉訳 (1979) 青年期境界の治療. 金剛出版.
- 松木邦祐・鈴木智美 (2006): 摂食障害の精神分析的アプローチ. 金剛出版. 13-54.
- 滝川一広 (1978): 思春期における食事の障害. 中井久夫・山中康裕編. 思春期の精神病理 と治療. 岩崎学術出版. 223-253.
- 小此木啓吾 (1980): 青春・青年期の精神分析的発達論と精神病理. 青年の精神病理2. 弘文堂. 3-66.
- 斎藤久美子 (1993): ジェンダー・アイデンティティの初期形成と「再接近期危機」性差. *精神分析研究*. Vol. 37. No. 1. 41-51.
- 下坂幸三 (1988): アノレクシア・ネルヴォーザ論考. 金剛出版. 163-192.
- 津田真知子 (2001): 青年期女性の母親からの分離に関する一考察. *心理臨床学研究*. Vol. 19. No. 1. 1-12.
- 牛島定信・福井敏 (1980): 対象関係からみた最近の青年の精神病理—前青年期ドルドラムと前エディプスの父親の創造. 小此木啓吾編. 青年の精神病理2. 弘文堂. 87-114.
- Winnicott, D. W. (1964・1970): Psycho-analytic Explorations. The Winnicott Trust. 牛島定信監訳. (1998) ウィニコット著作集第8巻. 精神分析的探究3. 岩崎学術出版. 22-51, 102-122.

A Study on the Maternal Separation of an Adolescent Female Through Eating Behavior, Sexuality and Somatic Symptoms

Osaka Shoin Women's University
Mayumi NEMOTO

ABSTRACT

Since separation from a parent implies a loss of that parent, this experience of loss brings adolescents separation anxiety and abandonment anxiety. In this short paper, I discuss the therapy process of an adolescent female client with repetitive excessive eating behaviors, use of laxatives, and sexually deviant behaviors, from a viewpoint relating maternal separation to eating behaviors, sexuality, and body image. In the development of therapy, the client experienced her sense of anxiety and vanity as her own, accepted her body as her own which she had previously been unable to do, and these experiences made it possible for her to acquire a sense of "Being Me". For adolescent females, it is indispensable to establish a boundary between self and parent, and to accept her body as her own as a step toward independently "Being Me". It appeared as if the introjected mother object physically indwelled in the internal world of the client, who had a somatic self-image undifferentiated from her mother. By eliminating and separating this incorporated mother from her body, the adolescent client lost her mother object psychologically and was able to acquire the self-identification of "Being Me".

Keywords: separation anxiety, abandonment anxiety, psycho-soma in-dwelling, incorporation, Being Me